

企業名： 中部鋼鉄株式会社

レポート名： 中部鋼鉄 統合報告書 2024

1. この会社が目指す姿が理解できるか（将来）

中部鋼鉄株式会社は統合報告書 2024 の 6 ページにて価値創造プロセスを明記している。その中で、【「100 年企業」を目指して、日本で唯一の電気炉厚板専門メーカーとして培ってきた自社の特性を生かし、業界内で存在感のある企業を目指します。】(原文ママ) と記載されている。加えて、7 ページに、重松久美男代表取締役社長の、脱炭素社会の実現に向けトップランナーでありたいとお言葉がある。これらのことから、中部鋼鉄は今後、これまで築いてきた厚板専門のメーカーとしての技術や品質を通じて未来に貢献できる会社を目指していることが理解できる。加えて、こうした目指す姿を実現するために行っている具体的な取り組みも明記してあることが理解に深くつながっている。たとえば、カーボンニュートラル対応として電炉への更新や、再エネ電力の調達など、環境負荷を抑えた生産体制への転換に取り組んでいる点は、「脱炭素のトップランナー」という発言の裏付けとなっており、理念と戦略の整合性が感じられる。また 12 ページから読み取れるように、市場のニーズや労働力の供給状況を踏まえながら、生産計画を立てていることも理解を促進させている理由の一つである。このように、統合報告書を通じて、中部鋼鉄が掲げる将来像は単なる理想論にとどまらず、具体的な取り組みに裏打ちされた実現可能性の高いビジョンであることが理解できた。

2. この会社の競争優位性が理解できるか（現在）

国内唯一の電炉厚板専門メーカーという点で、中部鋼鉄は競争優位性を高く保っていることが理解することができた。4 ページを参照すると、電気炉を用いて鉄づくりを行っていることで CO₂削減に貢献している点が、一つの競争優位性であると分かる。高炉法を用いる場合と電炉法を用いる場合との違いを明確化させるために、主原料、製造工程、特徴、製品 1t あたりの CO₂排出量それぞれを比較した表を記載していることにより、こういった観点で中部鋼鉄が他社と差別化できているのかを理解することができた。

また、他社が模倣できない理由についても、「厚板専門メーカーとして高い競争力」の観点で明確に記載されていることが、理解促進につながっている。工場レイアウトや製品供給体制、電炉厚板製造への高い参入障壁等について具体的な記述がなされており、こうした点からも、同社が持つ独自性の強さと模倣困難性を読み取ることができた。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか（変化）

上述した部分と被るが、厚板製造に特化した工場レイアウトや製品供給体制といった、他社

が容易に模倣できない構造的な強みによって競争優位性に持続性があると理解することができた。こうした構造的な強みにより同業他社が同じ領域に参入しようとしても、大規模な設備投資や工程管理の見直しが必要となり、ハードルが非常に高いことがうかがえる。また脱炭素社会の到来に備えた先行的な対応を行っている点も理解を促進させた点である。具体的には、電炉による CO₂排出削減や再生可能エネルギーの活用といった環境負荷低減の取り組みが進められており、今後の環境規制の強化に対しても柔軟に対応できる体制が整えられている。実際 17 ページから 23 ページにかけて気候変動への取り組みと環境負荷低減への取り組みが詳しく記載してある。環境対応力は、長期的にみても企業の競争力を左右する重要なファクターである。このことを考慮すると中部鋼鉄はその点で優位に立っており、持続性があると理解できる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

中部鋼鉄で自身の人的資本の価値向上を図ることは十分に可能であると感じた。24 ページから 26 ページの人的資本に関連した取り組みからそのことが伺える。中部鋼鉄の経営理念は、「人を基本とする経営を実践する」であり、これをもとに「従業員一人ひとりがその能力を存分に発揮できる環境を整え、組織（チーム）として目標にチャレンジする文化を定着させることで、外部環境の変化に適応できる柔軟かつ強靱な組織を構築し、企業グループとしての持続的な成長につなげる」という基本的な考え方を設定している。これらに基づき、「自律・挑戦・協働」の人材ポリシーが明示されており、これを人事考課制度に組み込むことで、社員一人ひとりの成長意欲を引き出す仕組みを整えている。これに加え、階層別研修、技能資格取得支援、通信教育や e ラーニングなど、幅広い教育体系が整っており、特に中核人材や管理職に向けた戦略・会計・法律を含む専門研修も充実している点は、自身のスキルの高度化につながると感じた。また、人的資本の強化と同時に「組織力の強化」も重視しており、1on1 ミーティングや経営方針説明会、社長とのディスカッションの場など、現場と経営層の双方向のコミュニケーションが活発に行われている。これらの取り組みから、自ら主体的に学び、実践と対話を重ねることで人的資本の価値を着実に高めていける企業であると理解した。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

本報告書は、企業の理念と具体的施策が明快に紐づけられており、非常に完成度の高い内容だと感じた。環境対応、人的資本、競争優位性といった観点に加え、KPI や定量的データも適切に開示されており、企業の現状と将来像が明確に伝わってきた。強いて改善点を挙げるなら、営業利益率が業界ナンバーワンとされている点について、営業利益「額」が業界内での程度の規模感にあるのか、相対的なポジションを知りたかった。収益性の高さは理解できたが、絶対的な事業規模の補足があれば、さらに理解が深まったと感じる。